

## 講 演

U.D.C. 061.22 : 621.37/.39 (52) (043.5)

### 会 長 就 任 挨 拶\*

会 長 阪 本 捷 房

この度会員の皆様方の御推薦によりまして会長の席を汚すことになりましたのは私の最も光榮とするところであります。唯今溝上前会長から、30年度のやり方につきまして非常に御遠慮深いお話があったのであります。私といたしましても31年度におきまして、果して前会長の後を引継ぎまして、十分な仕事ができるかどうかという点を心配しているのであります。つきましては前年度から引続き本学会の役員として仕事を続けてやっておられた方々並びに新しく本学会のために御尽力いただきます方々の御支援を得まして、この一年間、何とか無事に過ぎてゆきたいという気持ちで現在はいっぱいでございます。この機会に当りまして、日頃私が頭の中で考えております事柄の一端を申し述べまして、学会のこれからのゆき方並びに会長に就任いたしました御挨拶に代えさして頂きたいと思う次第であります。

先程幹事の方の事務報告にございましたように、昨年の10月に石川武二さんに電気通信技術委員会の会長をお譲りいたしますまで、数年間、私が本学会の技術活動の一端として、技術委員会をどうしていったらいいかについて、かなり頭をつかっておりました。そのやり方につきまして、当時の技術委員会の委員であった多勢の方々の御賛助を得まして、唯今のような形の技術委員会をスタートしてみたのであります。初め一年間ぐらいはその行き方につきたいへん心配もし、自信のないような感じももっておったのでありますけれども、今日まで数年間この行き方が続き、現在もそのような形で無事に動いていますし、役員会におきましても、予算をさらに増加して、その活動をますます活発にするようにという御指示もありまして、たいへん私としては満足もし、喜んでいるのであります。これは当初に考えました一つの向きだけではありませんから、これから将来いい姿に進展してゆかなければならぬ

と思いますので、そのように石川さんに御心配を頂いている次第であります。その時の考え方的一端を、この機会に御披露したいと思っております。従来の学会の委員会のうちには、学会の会員が誰でも参加出来るものが極めて稀であるということが私の頭に深くこびり付いており、この点が昔からの欠点であったと思うのであります。学会そのものはどういう形で会員の方々に対して働き、また会員の方々からはどういう風に関心を持って頂くかという点が学会の一つの重要な事項であります。昔からとられている方法は、学会雑誌でその関連性をとるのが一つの重要な部面であり、現在もその通りであるのであります。この関連性は多ければ多いほどよく、雑誌以外にも出来るだけそのような面を育てたい気が致します。会員があつての学会でありまして学会があつて後会員があるわけでないのでありますから、いかにして学会の中心部と会員とが太い紐で繋がるかを考える点に、学会としての発展もあり、また将来への期待もあると思うのであります。これには、学会の方から手を伸ばしたらいいかもしれませんが、広い会員の方々からも積極的に手を伸べて頂きたいと思うのであります。

技術委員会もその一つの方法だと考えまして現在の姿を実行した訳であります。こういう考え方は役員の方々が常日頃苦心もし、また心配もしておられるのでありまして、一步一步こういう面を出来るだけ多く築き上げていきたいと考えるのであります。

戦後、私が自分の職場としております大学を中心として観察しておりますと、一つ目立ちますことは、戦後の大学の学生が、学会に対して関心が薄いということでもあります。これは東京大学だけの例かもしれませんが、教壇生活を20何年しております、なぜそういうふうに変ってきているのかを、実は現在まで解析できないのであります。戦後の社会が、学生をそういう気分させている、あるいは経済的側面がそういう結果をもたらす一部の原因になっていることもあるかもしれませんが、ひるがえって、学会としてこの点を観察してみますと、学会のいろいろな面での活動の

\* New President's Adress, By TOSHIFUSA SAKAMOTO. [論文番号 2815]

\* 本稿は昭和31年5月12日の本会通常総会における講演の要旨である。

中に、学生を対象にしたことがどの程度考えられているか、あまり自信のある答が言えないような気がします。全体の数から申しますと、学生数はそうたくさんございませんから、そうたいしたことではありませんけれども、重要なことは自分の将来の専門が定まった入学のときに学生をして学会に関心を持たすようにすることであろうと思います。この点につきましても学生が何とか関心を持ち易いようにしたいと考えます。

私が日頃職場としております大学の半分の部面は唯今申し上げました教育面のことでありますが、もう一つの半分の面は申すまでもなく研究の面であります。研究そのものは大学ばかりではなく、至るところで行われているわけですが、大学もその一つであるという面から、この機会を利用いたしまして、研究の道という点について少し時間をいたさきたいと思うのであります。これは具体的に研究する題目であるとか、あるいは何が今重要であるかという意味ではないのであります。研究をしてゆきます場合にとるべき態度あるいは考え方についてであります。電気通信学会はその名の如く、電気通信に関する学会であります。電気通信学の中に盛り込まれている内容が、私なりに分けて解釈いたしますと、電気通信工学のほかに電気通信理学（こういう言葉は、ないかも知れませんが）に類するものがあるように思うのであります。電気通信学会では電気通信工学だけでなく電気通信理学をも取扱うのは当然だと思います。

ところが現在電気通信工学という名の下に、その実は内容的に、電気通信理学であるようなものがあるように思うのであります。この点で工学者は、工学的研究という意味を見出さなければいけないと思います。先程幹事さんからのお話にも、学会雑誌がむずかしいというような表現があったのであります。この点は島津編集長を中心として編集の方々によく御考え頂いておりますのでいい姿で、できるだけたくさんの方々にフィードバックできるように、進んでおります。ただ従来の学会雑誌で比較的弱味とされていますのは実際面とのつながりかと思ひます。大学に於いて私共いろいろ話を聞いておると、こういう巧いことができた、こうやれば、何かできるというよう

な、非常に珍しいことに関心が多過ぎるような気がいたします。工学の中にはこういうまいことができる、ということも必要でありますけれども、もう一つ重要なことは、こういうことがたしかにできるという、その「たしかに」ということであります。できた機械が日本のおもちゃのように使えないことがよくあることを時々耳にいたしますが、これは工学者としては非常に辛い批判だと考えますので、通信学会としてはそういう面に大いに力を入れて、こういうような発表が多くなり、できるだけ会員の方々に行きわたるような道がとれると結構だと思います。

もっと卑近な場合を考えますと、元来 100 万円できてきたものが 90 万円できてきたという発表は学会雑誌には一つも見ないのであります。工学的にはこれは非常に重大なことだと考えます。これは製造者の方々がお考えになればよろしいかも知れませんが、研究を専門とされる方々もこの種の研究をどんどん発表下さって、読者の方で早速利用することが出来れば産業上にも大変好ましいことだと思います。

これを簡単な言葉で申しますと、ポシビリティとプロバビリティの問題だと考えます。研究そのものが、地に足のついた観念が進められ、有用な成果が学会を通して会員全体に貢献することが出来れば学会としてこの上ない喜びでもあり幸でもあろうかと思ひます。

30 年度に前会長が進んでこられました道をよく勉強し、またそれをできるだけ踏襲いたしまして、且つ会員の方々、特に役員の方々の御支援を得まして、ちょっとでもいいから 30 年度よりもプラスの方向に学会が進歩するようにしたいというのが、私今日頭の中で考えている第一のことです。それには会員の皆さん方が、学会に深い関心をもって頂くのがその根本だと思ひます。会員の皆様が集って学会ができていのであるから、それがよくなれば自分がよくなることであり、同時にみんながよくなることだというお考えのもとに、われわれを、御支援御べんたつ頂ければ、私としてこれに幸いするところが無いと思ひます。

御清聴を感謝いたします。